

樹木医になって15年が過ぎました

東光園緑化株式会社 管理課／樹木医・自然再生士 鈴木 信晶



樹木医になるきっかけ

樹木医になって15年が過ぎました。合格したのは11期(2001年)、ちょうど農林水産大臣認定事業が廃止され、日本緑化センターが実施団体となった年でした。まだ試験の過去問題集もなく、どんな問題が出るのかの情報ほとんどない時代でした。手掛かりは『樹木医の手引き』だけ、高校の教科書を読み返したり、自然をテーマにした雑誌を読んだりという受験勉強でした。

樹木医になり、管理の現場に行く機会が増えましたが、元々造園会社で設計・施工・営業という新しいものを作っていく職場で樹木と接してきました。

樹木医受験のきっかけは、傷んだ樹木を治療し、樹勢回復をする勉強会に参加したことです。先輩樹木医から樹木の生理や成長の話だけでなく、自然とは、人や細胞の話、昔話、社会生活の話、全てが樹木を元気にしていくためには必要だということを教えていただきました。奥深い話を聞くことによってさらに興味がわき、樹木医になりたいと思うようになりました。

ヒートアイランド現象と樹木

今年の夏は、梅雨が早く明けたかと思うと、8月に入り戻り梅雨か秋雨のように雨の日が続きました。地球温暖化で気候の変動が激しくなり、世界のあちこちから干ばつや大雨のニュースが聞こえてきます。日本でも激しい雨が降り、記録的短時間大雨情報がやたらと発表されるようになりました。

取り扱う植物も、私が大学生の頃の昭和50年代には、東京ではクスノキの青軸(幹がまだ緑色の若木)を植えると枯れてしまうと教わり、シマトネリコは室内緑化用でした。今ではヒートアイランド現象が進み、東京都心部の冬の最低気温の平均が昭和30年代と比べると約4度上がり、夏には今までになかった「猛暑日」という気

象の用語もできました。

最近商業施設の屋上改修植栽に関わることもありましたが、発注者側から「南国の植栽」

で、かつ「ヤシノキも幹が曲がった葉の長いタイプ」との要望をいただき、鹿児島の畑でフェニックスレクリナータを見つけました。まだ東京では植栽を行ったことがないとのことでしたが、東京と鹿児島の畑の地域の気候を比べ、冬の気温がほとんど変わらないことが分かり、メインの樹木として使用することになりました。そのほかの中低木も、比較的寒さに強いアメリカデイゴやジャカラング、都内の屋外で越冬している観葉植物を中心に使用し、樹木医として、こんな植物を植栽してもいいのかなと思いつつも完成させました。また、小さな植栽地の中で少しでも条件の良い場所を探し、ブーゲンビリアで壁面緑化ができないか、またどんな植物が冬越しできるのかと新たに挑戦しています。

一方では、既存の樹木は夏季の高温と乾燥に順応できずに衰退しているものが増えています。新しい植栽を考える立場では、都心部の気温上昇を逆手にとって暖かい地方の植物を探して使用する楽しみもありますが、樹木医として既存樹木を守る立場では、今までにはなかった新しい害虫が入り、あまり気にしなかった病気も発生するようになりました。春を彩るソメイヨシノも戦後植栽されたものが老木となり、東京の夏の高温乾燥などに耐えられず、病気や害虫に痛めつけられています。

樹木医になってから個々の樹木の相談もありますが、雑木林の維持再生の相談も多く、元に戻すことはできないのに、さらに変化し続ける環境の中で、どのようにして樹木を守るか、どこまでできるのかと、毎日勉強を続けています。